

俳句日記 2016-2018

池窪弘務

2018年は来年。過去から未来へ、どこまで続くのか……。とにかく、歩こう。

ホームに戻る



2016年

ホームに戻る

一月

戻れない日々
の足跡
年歩む

朝日射す地蔵に供つあり鏡餅

新年も地蔵巡りの散歩かな

初日の出見知らぬ人と拝みけり

凍蝶の今日一日の目覚めかな

小寒や残り薬を睨みをり

凍土に蘇る白シクラメン

乗初は病院通ひ優先席

ゆつくと眠るのがいい冬の蝶

二月

春になれば花を買はうと義母に言ひ

三月

静かになり盆栽に降る春の雨

子に送る今年の梅の写メール

70はもう死に時か桜咲く

五年間まだ五年間春遠く春 3.11

セーターを一枚脱がす春の風

ハクシヨンが入れ歯を飛ばす老いの春

忘れ行く過去という名の水仙の花

春の野は命の集ふ宴かな

四月

盆栽の桜一つの花見かな

春灯吠え防止首輪の犬走る

掘り起こす土黒々と春の息

父親の酒肴を祖う昭和の日

五月

従兄逝く声の届かぬ立夏かな

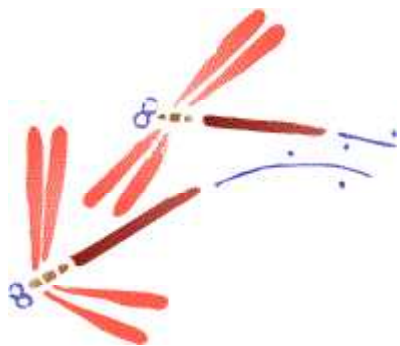
七月

七十才しみぢみ感じる大暑かな

透き影に水飲む老母夏の夜

夕立や緑のさあつと蘇り

八月

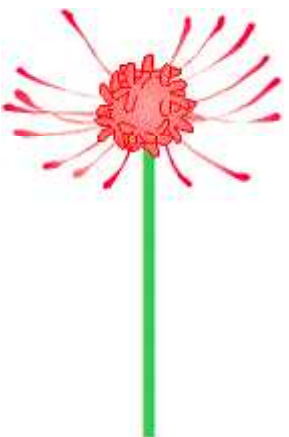


赤とんぼ孤独な指にと・ま・れ

九月

ただ歩く健康のため秋の空

自治会のお祝い頂く敬老日



線香の絶えし地蔵に彼岸花

一口月

殴られ少年野球秋の空

アホな子も70となる天高し

切ないほどカレライスが食べたくなくなったり、

酢豚が恋しくなったり、卵かけご飯が欲しくな

るといふようなことはありませんか？

ビーフシチューもその一つ。今日は食べに行こ

うと決心していたのに、焼き肉弁当に負けました。いろんなものが食べられるから、人間って幸せですね。牛や馬なんて草ばかり。ライオンは生肉ばかり。可哀想ですね。

秋涼しピーフシチューの匂ひかな

もう半丈睡眠薬の夜長かな



ふと気づく書斎の窓の秋の月

平幹二郎さん、武邦彦さん、竜爺……。

次々と人みまかりぬ秋深し

秋深し亡き人の歳百を超ゆ

目に入り涙に溺れる羽虫かな

繰り返す老老介護秋深し

一一月

霧深し地蔵の消ゆる池の端

繰り言の老々介護秋深し

儂きは人の命か秋の空

秋霖や稲穂の秋と彼岸花

心してキャベツを食べる冬の入り 野菜高騰

独り寝の形に合はせ布団敷く

冬の月差別がひとりで歩き出す アメリカ大統領

選挙

大仏とツーショットの小春かな 飛鳥寺

力尽き路上に落ちるの

のかぶ墨絵かな

寒木に雀の夫婦身を寄せ

一二月

十二月心の窓をキュツと拭く

忘年会昨夜のことを妻に聞く

年の瀬や孫の手伝心待 孫春菜手伝い

去年倒れてからいつもそんな気持です。まあ、

死ぬまで生きよう。

けふ死ぬか明日死ぬかと十二月

鶴鴿のついでに離れぬ枯野かな

袖三つ浮かべて嬉し冬至かな

565の俳句です。これはこれでいいのかなあと
思います。

拍子木の通り過ぎる冬至かな
寄植葱の南天の実に光りあり

俺か……。

冬の霧一間先に影法師日

雨の音真冬の夜を深くする

クリスマス命の尻尾引き継いで

大晦日一人観ている格闘技

大晦日徐徐に近づくあの世かな

2017年 ホームに戻る

一月

冬深し七十の手習の介護かな

初日の出なんだ昨日と変はらぬ

年賀状今年限りと友が告げ

暗き空心経唱える阪神忌

ゆくりと俳句を詠もう寒椿

二月

立春の朝日と共に風呂洗ふ

炒り卵食べて嬉しや春の音

春寒や毎ハウスのクラシック

どか雪や春のニ文字は消えにけり

花粉症天まで届けハックション

土塊の光り始める春や春

三月

盆栽の梅のほころぶよき日かな

マフラーも手袋もとう春散歩

義母^は老健に行く春静か

松方弘樹さん、渡瀬恒彦さん私と同年配のス

ターが亡くなりました。楽しませてくれてあり

がとう。

春の雪色即是空スター逝く

定年を卒業としく別れかな

童女^{わらはめ}の地藏に供ふ萱草

春の鳥歌ふやうに経唱へ

興福寺の乾漆群像展

時超ゆる阿修羅の祈り春の風

春風や愁いを含む阿修羅像

四月

朝刊のポストに落つる春の音

呀返る北朝鮮の核実験

春風や睡蓮木に季語はななく

五月

土塊の光り仄かに春の雨

連休の中の平日春惜しむ

雑草が雑草を抜く夏初め

短夜に宛先のないうメール打つ

湯煙や夢千代日記初夏の旅 湯村温泉

天空の駅から望む初夏の海 余部鉄橋

こののどろ奇跡のやうに舞い降りる 豊岡市

快慶と六道巡り奈良の夏 奈良県立博物館

六月

一センチ短夜に飲むウイスキー

宮参り稚児泣かずに祝詞聞く



父の日に紫陽花をむらふ果報者

紫陽花や七十才の手植ゑかな

讃岐富士七山ありて青嵐 高松道

夏座敷無人の家に風通す さぬき広島

七月

老眼鏡トイレにもあり梅雨の朝

ゴキブリを取り逃がしたり夏の夜

屁も湿る欠伸も湿る梅雨最中



撫子は亡き母の好きな花でした。家紋が撫子
だったせいもあります。また、母は小首を傾げ
て相手を見る癖がありました。土に植えた撫
子も小首を傾げて私を見ているようです。

撫子は小首傾げる妣ひの笑顔

腰伸ばし夏空仰ぐ誕生日

紫陽花の一輪挿しや部屋仄か

八月

生きとていつとへの感謝終戦日



それぞれが命背負ってばった跳ぶ



布袋草孫の寝顔を思ひ出す

九月

赤とんぼ一期一会の出会いかな

